

「自分だったらどうする」の活用にあたって

設 問	指 導 上 の 留 意 点 等	発 展
ゴミ拾い	<p>例題として活用する。考えやすいように、ボランティア部と設定している。部活動（または、役割として決まっている係）であるから行わなければならないのか、気づいた人が行えばよいのではないのか。自分の日常生活と重ねて考え、話し合いをさせたい。</p>	<p>ボランティア部という設定がなくてもよい。</p>
震災で壊れた建物	<p>震災の爪痕の残る建物の扱いは、大きな議論となった。震災の記録として残すことで後世に継承し、災害への備え、防災の必要性を伝えたいという意見がある一方、震災で受けた被害や、辛い気持ちを思い出してしまうので、取り壊して欲しいという意見もある。大人でも難しい選択である。</p>	<p>立場をかえると考える視点も変わる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・住民の立場 ・行政の立場 ・その場所で亡くなった遺族の立場
避難所生活	<p>慣れない不便な避難所生活は、大きなストレスを抱えることになる。その生活の中で、よかれと思って行っている行動も、他の人にとっては迷惑と感じられることもある。携帯電話の光がまぶしく眠れない。歩く足音が床の振動となり気になって眠れないなどの事例があった。不安を抱え集団で生活する難しさを想像させ、また、生活するためのコミュニケーションの大切さに気づかせたい。</p>	<p>高齢者だったら、母親だったら、体調がよくなかったらなどと条件を変えて考えることも効果的である。</p>
記念写真	<p>震災後、たくさんの人々が被災地を訪れ写真を撮る姿が見られた。被害の様子を多くの人に知ってもらいたいという気持ちがある一方、その土地の人の無念さ、やりきれない気持ちの中で、写真を撮られることの辛さを理解させたい。カメラを持っている人に不快感を覚えたという事例がある。</p>	<p>自分の家を片づけてくれたボランティア、通りがかりのボランティアと設定を変えてもよい。</p>
支援のお礼	<p>被災校には、たくさんの支援物資が届けられた。善意のものであったが、被災された町では着られないような派手なデザインの衣類や使えないもの、お礼を求めるものがあった。（被災地では“お礼疲れ”という言葉も聞かれた）相手の状況をどのように思いやればよいのか考えさせたい。</p>	<p>東日本大震災からの学校再開のめど立たない学校がまだ存在することを想起させたい。</p>
ボランティア	<p>片づけなどの作業をしている人にどのように接するかは、ボランティアのニーズを考えるきっかけになる。これから子どもたちが行うボランティアの基本（ニーズに即したボランティア）について学ばせたい。</p>	<p>どのようにすることが相手の立場に立った、役立つボランティアなのか考えさせる。</p>